

居心地のよい学級集団づくりの指導の在り方（第一年次）

—認め合う姿の日常化を通して—

長期研究員 齊藤 雄策

《研究の要旨》

児童相互の好ましい人間関係が育まれていく支持的な風土のある学級集団とは、児童一人一人にとって居心地のよい集団である。本研究では、実態把握を基に実践内容を検討し、認め合う姿育成のサイクル（授業実践・日常指導・情報発信）を実践ごとに回しながら認め合う姿の日常化を図ることで、居心地のよい学級集団づくりの指導の在り方を探った。その結果、友達を認める意識と友達に認めてもらっている意識が高まり、Q-Uの「学級生活満足群」の割合にも上昇が見られた。

I 研究の趣旨

文部科学省の「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、近年不登校の児童生徒数は増加している。また、同資料によると、不登校の要因について、「学校、家庭に係る要因」の「学校に係る状況」においては「いじめを除く友人関係をめぐる問題」という人間関係に関わる要因が最も多い。福島県においても、不登校児童生徒の本県児童生徒千人当たりの出現数は年々増加しており^{※1}、憂慮すべき課題と言える。また、次期小学校学習指導要領解説総則編では、児童相互の好ましい人間関係を育てていく上で、学級の風土を支持的な風土につくり変えていくことの大切さが示されており、児童同士の人間関係を育む学級経営の充実が今後一層求められる。

河村茂雄(2013)^{※2}は、「児童生徒が所属する学級集団をいごちがよいと感じるのは、(1)トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている、(2)自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされていると感じられる、という二つが満たされたときである」と述べている。

そこで、本研究では、児童が互いの考えや気持ちを認め合う姿を日常的に持続させていくことにより、居心地のよい学級集団づくりの指導の在り方を探っていきたいと考えた。

※1 頑張る学校応援プラン～ふくしまの挑戦と戦略～(福島県教育委員会平成31年)

※2 応研レポートNo. 81 河村茂雄(応用教育研究所平成25年)

II 研究の概要

1 研究仮説

学級活動や日常指導を通して、以下の手だてを講じて認め合う姿の日常化^{※3}を図れば、居心地のよい学級集団がつけられるであろう。

【手だて1】実態把握を基にした実践内容の検討

【手だて2】認め合う姿育成のサイクル

※3 本研究では、認め合う姿を「児童が互いの考えや気持ち、言動を尊重し合う姿」とする。日常化を「学校生活において児童の認め合う姿が見られること」とする。

2 研究の内容

(1) 【手だて1】実態把握を基にした実践内容の検討

図1の①～④の方法で児童の実態を多角的・多面的にとらえる。把握した実態を基に実践内容を担任と検討することで、効果的な指導につなげる。また、③～⑤については、研究を通して継続的に行うことで、各実践内容の検討に生かしていく。

実態把握の方法	目的
①児童質問紙	○主に児童の「友達を認める」意識をとらえる。
②Q-U	○「承認得点」から、児童の「友達に認めてもらっている」意識をとらえる。 ○学級満足度尺度から個と集団の居心地のよさをとらえる。
③担任との情報共有	○普段の児童の学習面や情意面、行動面について担任との話し合いからとらえる。
④児童観察	○質問紙やQ-U(客観的理解)と担任の情報(主観的理解)を基に、授業や日常生活を観察することで、児童理解を深める。
⑤振り返りシート	○授業実践後の児童の学習内容についての意識をとらえる。

図1 実態把握の方法と目的

(2) 【手だて2】認め合う姿育成のサイクル

① 体験的理解を促す授業実践

学級活動の時間に、教育相談的な手法^{※4}を用い、認め合うために必要なルールやスキル、互いを共感的に認め合うことの大切さを体験的に理解させる。

※4 予防的・開発的な教育相談の視点から、好ましい人間関係を養ったり、自己理解を深めたりするなど、人格の成長への援助を図ることが期待される手法(例:構成的グループエンカウンター(SGE)、ソーシャルスキルトレーニング(SST)、プロジェクトアドベンチャー(PA)など)

② 意識や行動の持続を図る日常指導

授業実践で学習した内容に関連したSGE^{※5}やSST^{※6}を朝の会と帰りの会で行う。また、学習した内容を実践できたかどうかを一日の終わりに振り返るチェックシートを活用する。これらにより、授業実践で学習した内容についての児童の意識や行動する姿の持続を図る。

※5 ゲームの要素をもった課題と取組の振り返りを含んだグループ体験活動であり、仲間との心のふれあいを体験しながら、自己理解を深めたり承認感を高めたりすることが期待される手法

※6 よりよい人間関係を築き、維持していく社会的技能を向上させるトレーニング

③ 児童の意欲の向上や家庭との共有を図る情報発信

授業実践や日常指導における児童の姿を、掲示物や通信で発信し、認め合う姿の価値付けを行う。それにより、児童がさらに認め合っていこうとする意欲を高めていく。また、情報を発信することにより、児童だけでなく学校と家庭が認め合う姿のよさを共有できるようにする。

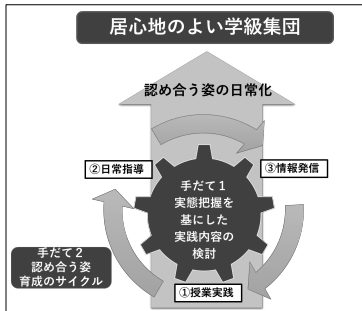


図2 研究構想

【手だて1】を基に、【手だて2】の授業実践・日常指導・情報発信のサイクルを回し、研究を進める(図2)。

3 研究の実際と考察

対象学年 第3学年 74名(3学級)

(1) 【手だて1】について

図1の方法による実態把握の結果、各学級に共通する実態を担任と共有することができた。そして、把握した実態を基に、5つの実践内容を担任と検討しながら行った(図3)。また、実践を進めながら継続的な実態把握を行ったことで、実態に応じた実践内容の修正を図ることができた。以上の点で、実態把握が実践において有効に働いたと考えられる。

各学級に共通する実態			
<ul style="list-style-type: none"> ○話の聞き方が十分に身に付いていない。 ○友達を認める意識はあるが、友達への言葉遣いがよくない面が見られる。 ○友達から認められている意識が低く、自分にはいい所がないと感じている。 ○自分の考えや気持ちを表現することを苦手としている。 			
実践内容			
	実践	①授業実践	②日常指導
実践Ⅰ	相手が気持ちよくなるまき方をしよう	授業1 まき方名人になろう(SSTの活用)	まき方名人チャレンジカード ・そうたねゲーム(SST) ・30秒トーク(SST)
実践Ⅱ	あたたかい言葉をかけよう	授業2 「ちくちく言葉」と「ふわふわ言葉」(SGEの活用)	ふわふわ言葉チャレンジカード ・「どうぞ」ありがとう(SST) ・ある場面で声かけ練習(SST) ・ほめほめじゃんけん(SGE)
実践Ⅲ	友達や自分のいいところを知ろう	授業3 いいところさがし(SGEの活用)	いいところ貯金箱(帰りの会の「いいこと発表」強化)
実践Ⅳ	意見を伝え合おう	授業4 意見を伝え合おう「フープリレー」(PAの活用)	アインシュタインの言葉(PA) ・班で目標を達成しようチャレンジカード
実践Ⅴ	意見を伝え合おうⅡ	授業5 意見を伝え合おうⅡ「昔の家で生活！」(SGEの活用)	・レッツみとめあいチェックシート
			・「まき方のポイント」掲示 ・通信の発行
			・「ふわふわ言葉」の掲示 ・通信の発行
			・いいところさがしのワークシート掲示 ・通信の発行
			・通信の発行

図3 各学級共通の実態と実践内容

(2) 【手だて2】について

本稿では、実践Ⅴを基に述べる。

① 体験的理解を促す授業実践

【手だて1】で示した実態把握により、以下の実態があることを確認した。

○自分の考えや気持ちを伝えた方がよいと感じて

いるが、伝えることができない児童がいる。

○自分の意見を伝えられる児童に偏りがみられる。

この実態を基に、児童が認め合うためには、互いの考えや気持ちを伝え合えることが必要であると考えた。そこで、実践Ⅴでは伝え合う活動を通して、自分の考えや気持ちを伝えることが苦手な児童にも互いの考えを認め合うよさを実感させたいと考え、以下の工夫で授業を構成した。

○意見を言いやすい題材の選択とグループの人数

○一人一人が自分の意見を伝える時間の設定

○意見を伝え合う際の約束の提示

○教師による伝え合う場面のモデリング

児童が社会科において古民家を見学した経験があることから、「無人島SOS」(SGE)を参考に「昔の家で生活!」という教材を開発し、実践した。昔の家で生活するという設定の基に、必要だと思う持ち物をリストの中から8つ選び、意見を伝え合うことを通して互いの考えを認め合う姿をねらった教材である(図4)。

持ち物リスト	
1	ボール3こ(サッカー・野球・トランプボール)
2	トランプセコ
3	小型テレビ1台(5時間てじゅう電切れ)
4	ゲーム1台(5時間てじゅう電切れ)
5	人形ゲーム(すずろく)
6	好きなマンガ10さつ
7	ひっきり用具と自由ちよう
8	ろうそく10本とマッチ1はこ
9	かいちよう電どう(電池がひつよう)
10	時計(電池がひつよう)
11	おやつ7日分
12	電池(必要だけ)
13	せん面セット(人数分)(タオル、シャンプー、石けん)
14	まききょうセット(おなかの家、まきま、かぜ薬など)
15	歯みがきセット(人数分)
16	まら(人数分)
17	毛布(もうふ)(人数分)
18	着がえ(7日分)
19	ホッカイロ(必要だけ)
20	ストーブ(マッチがひつよう)
21	こたつ(電池がひつよう)

図4 持ち物リスト

実際の授業では、選んだ持ち物とその理由について各自がグループの友達に伝えることができた(図5)。実践Ⅳの授業では意見を伝えることが苦手で話合いの輪に入らなかった児童Aが、生き生きと自分の考えを伝える姿も見られ、上記の工夫が効果的に働いたと考えられる。また、あるグループでは、8つの持ち物を選ぶ話合いで、ボールを選択しようと考えた。その時、ボール遊びが苦手な児童の「できない」という正直な発言に対して、他の児童がその気持ちを認めて「トランプはどうか」と他の持ち物を提案し決めることができた。友達の影響や気持ちを互いに認め合うことができた場面であると考えられる。



図5 伝え合う児童の姿

授業の振り返りシート(4件法)の「自分の考えや気持ちを伝えることができた」と「友達の影響や気持ちをきくことができた」の項目について、実践Ⅳの授業後と実践Ⅴの授業後の回答を数値化し比較した。すると、どちらの回答も平均値が有意に上昇した(図6)。

質問項目	実践Ⅳ	実践Ⅴ	
自分の考えや気持ちを伝えることができた	2.79	3.32	p<.05 df=71 t=-4.21
友達の影響や気持ちをきくことができた	3.26	3.50	p<.05 df=71 t=-2.46

図6 実践Ⅳ・Ⅴの質問の平均値比較

さらに、実践Ⅳで「自分の考えや気持ちを伝えることができた」の項目について、

否定的な回答をした児童25名に注目したところ、実践Vの回答結果において17名(68%)が肯定的な回答へと変化した。17名の児童の感想には「意見を言ってくれて気持ちがよくなった」「自分の考えを知ってもらってうれしいと感じた」といった記述が見られた。また、授業を通して、認めてもらう経験をしたり、友達を認めることのよさを感じたりすることができた児童が80%を超えた(図7)。

振り返りシートの質問項目	児童の割合
友達に自分の考えや気持ちを認めてもらった	84.7%
友達の考えや気持ちを認めることはよいことだと思う	90.3%

※「そう思う」「ややそう思う」と回答した児童の割合

図7 肯定的回答の割合

以上のことから、自分の考えや気持ちを伝え合う活動を通して、認め合うことのよさを体験的に理解できたと考えられる。

② 意識や行動の持続を図る日常指導

授業実践後、90%の児童が認めることのよさを感じていた(図7)。そこで、児童の意識を持続させるため、普段の学校生活の中で、友達を認めたり、友達に

図8 チェックシートの例

認めてもらったりしているかについてチェックシートを使った振り返りを5日間行った(図8)。シートは、帰りの会にチェックをさせ、認めてもらった際にどんな気持ちだったかをメモとして記録させた。

「友達を認めた」と回答した児童の割合は5日間すべて60%を超え、「友達に認めてもらった」と回答した児童の割合は4日間で60%を超えた(図9)。大きな低下が見られないことから、日常的に振り返らせることは、友達を認めたり、認めてもら

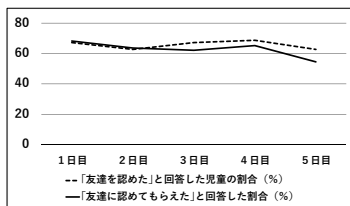


図9 認めた、認めてもらった児童の割合

えたりすることの意識や行動の持続に一定の効果があったのではないかと考える。

③ 児童の意欲の向上や家庭との共有を図る情報発信

各実践において、授業や日常指導の内容、実践における児童の様子や感想について紹介する通信を発行してきた。実践Vでは、児童が考えや気持ちを伝え合えた姿

図10 児童の感想を紹介する通信例

や、認め合うことの大切さを感じている意識の高まりな

どを家庭に知らせることで、目指す児童の姿を保護者と共有できるようにした(図10)。

事後の保護者アンケートからは、「(本研究で実践した内容について)今後の生活でも活用していきたい」「子どもも普段から(学習した行動ができたことを)教えてくれています」といった記述が見られた。このことから、情報の発信により、学校と家庭との目指す児童の姿を共有することができ、児童の意欲を高めることに効果があったと考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

事前と事後の児童への質問紙調査(4件法)の結果を比較すると、友達の「気持ち」や

質問項目	事前(6月)	事後(11月)	
友達が一生懸命やって失敗した時は許したり励ましたりしていますか。	2.76	3.04	p<.05 df=73 t=-3.39
友達のいいところを知っていますか。	3.00	3.26	p<.05 df=73 t=-2.40
授業で友達の考えたことを分かってしていますか。	2.82	3.04	p<.05 df=73 t=-2.63

図11 事前・事後の質問の平均値比較

「よさ」「考え」を認めることに関連した質問項目において有意な上昇がみられた(図11)。Q-Uの結果においては、事前調査(5月)で「承認得点」が低かった児童Bと児童C※7が事後調査(11月)では「承認得点」が上昇し、学級生活満足群へと変容していた。また、学年全体についても、「承認得点」の平均点の上昇が確認できた。本研究における実践が児童の認め合う意識の向上につながったと考えられる。

さらに、Q-Uの「学級満足度尺度(いごこちのよいクラスにするためのアンケート)」の事前と事後の結果を比較した。事前で「要支援群」の児童は2名いたが、事後では「要支援群」には入らず、満足度の向上がみられた。「学級生活満足群」

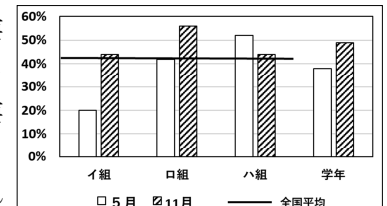


図12 「学級生活満足群」の児童の割合

の児童の割合については、3学級中2学級で上昇が見られ、学年全体としても上昇が確認できた(図12)。以上のことから、本研究による手だてが認め合う姿の日常化につながり、居心地のよい学級集団づくりの一助になったと推察される。

※7 Q-Uの結果における「留意するポイント」で「意欲低減」と判断された児童

2 今後の課題

本研究の日常指導において、朝の会や帰りの会を活用したが、取組内容や取り組む時間、期間については課題が残った。今後は、継続して取り組むことのできるような、児童の居心地のよさを高めるための効果的な手だてについて探していきたい。